

インターネットが与えるスポーツジャーナリズムへの影響

～The Influences of Internet on Sports Journalism～

1K03B158-2

普川まど香

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 石井昌幸 先生

I 研究の動機

インターネットはここ数年、急速に筆者たちの暮らしに浸透してきている。以前はスポーツの情報といえばテレビ、雑誌、新聞などに掲載されているものしか知ることができなかったが、インターネットが普及した現在では自分から知りたい情報を探しにいくことができるようになった。

インターネットがスポーツジャーナリズムに及ぼす影響とはどのようなものなのか、事例を用いて検証するとともに今後のスポーツジャーナリズムあり方について考察する。

II 各章の要約

第1章 はじめに

ジャーナリズムとは、報道の活動・論評の活動を行うことである。したがって、娯楽や広告媒体としての活動は付随的なものにすぎず、継続性や定期性も重要ではない。1回かぎりであってもジャーナリズムでありえるし、組織で活動をする必要もない。ジャーナリズムの活動は、あらゆる人がなし得る。

インターネットとは、世界中のコンピュータ・ネットワークを、共通の通信規約で相互接続してつくられた電子ネットワークの総称であり、ここ10年で急激に普及した。主に仕事上で情報収集をするツールとして使われてきたが、最近では個人的に使われることが多くなった。また、情報を収集するだけでなく、情報を発信するツールとしても注目され始めている。

第2章 インターネットとジャーナリズム

インターネットが普及し、おおよその情報が得られるようになった現在、元ライブドア社長の堀江貴文氏は「メディアはコントロールするものではなく、純粋な媒介者であるべき」と主張した。もちろん、インターネットはジャーナリズムにおいて今後とても重要な役割を担うと考えられる。だからといって人々の関心のある記事だけを発信していればいいというのは間違っており、ジャーナリズムによる権力の監視機能は必要であり、なくてはならない。

また、「2ちゃんねる」上での批判が大手放送局に謝罪のコメントをさせたという事例から、人々はインターネットを利用することで第4の権力ともいわれているマスコミに対抗できるほどの大きな発言力を持ち始めている。同時に、人々の「情報リテラシー」は日々情報の取捨選択を

迫られていることで必要性が高まり、インターネット上の情報に対してだけでなく、その能力は向上している。

近年、ブログを書く人たちが増えている。ブログとは、日々更新される日記的なウェブサイトのことで、総務省の資料によると、2006年3月末時点でブログ利用者数は約868万人。今やブログも一種のメディアとして注目され、世の中に対して影響力を持つようになってきている。

第3章 スポーツサイトの分析

世の中には、様々なスポーツ関連サイトが存在している。それらは大きく①スポーツメーカーサイト②スポーツニュース・コラム配信サイト③スポーツ新聞のオンライン版サイトの3つに分けられる。

スポーツジャーナリズムに関連する②のスポーツニュース・コラム配信サイトの中から代表的なサイトを3つ取り上げて分析した。分析の方法としては、扱っているスポーツの種類・コラムの有無・更新頻度・広告について・読者参加についての5つの点から比較・検証した。ここから、スポーツの種類は数多くあるものの、全てを網羅し切れていないということ、批評性よりも速報性が重視されている傾向にあること、インターネットの1番の特徴である双方向性をまだまだ使えていないということなどがわかった。

また、元サッカー選手の中田英寿氏のホームページ「nakata.net」を取り上げ、分析した。そして、中田氏の引退報道がHP上のみで行われたことからマスコミとスポーツ選手との信頼関係が崩壊してきているのではないかと、選手からファンに直接言葉を伝えるのにはインターネットが適しており、今後も中田氏のような選手が増えていくのではないかとということが読み取れた。

第4章 まとめ

現在の日本は、特有の記者クラブ制度により、自由な競争によるスポーツ報道の質の向上が阻まれている。しかも選手の談話中心の記事が多く、取材対象から独立できていないのが現状だ。そのような問題を解決するのがインターネットである。多くの人が自由にスポーツ記事を書くことで日本のスポーツジャーナリズムの質は向上し、組織に所属しない記者が増えることで取材対象からの独立も促される。

インターネットの登場で、誰もがスポーツジャーナリストになれる時代に突入していく。